

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人を紹介致します



合田 直弘

6月2日にエプソムで行われたG1英オーケス(芝12F6Y)を産駒のエンネイブル(牝3)が制した、種牡馬ナサニエルが今回の主役だ。同馬にとって、今年の3歳世代は初年度産駒で、すなわち、最初の世代からいきなりクラシックホースを輩出したのである。

ヤコブ・ロスチャイルド男爵夫人による、愛国における自家生産馬がナサニエル(生産者名義は、夫人が愛国に持つ生産組織キンコース・インヴェルトメント社)だ。オーケスの代表的前哨戦として知られるG3ミュージドラスの勝ち馬である母マグニラ・セントスタイルは、母として極めて仔出しの良い馬で、G1ファリーズマイルを制したプレイフルアクト、G1愛オーネス勝ち馬グレートヘンズ、G2ヨークシャーCなど2つの平地重賞を制した

他、ハードルのG1も制したパークアッシュヨーストなど、ナサニエルを含めれば6頭もの重賞勝ち馬の母となっている。そういう母に、欧洲の大種牡馬ガリレオを交配して生まれたのがナサニエルだから、同馬は超のつく良血と言つて間違ひはない。

ニユーマーケットのジョン・ゴスデン厩舎からデビューし、2歳時は2戦して未勝利に終わったものの、実はこの段階でナサニエルは既に伝説をつくりつつある。2010年8月13日にニユーマーケットで行われたメイドン(芝8F)でデビューし、勝ち馬

に1/2馬身及ばぬ2着だったのだが、勝ち馬はあのフランケルで、14戦14勝で競走生活を終えたフランケルが、2着馬に最も迫られたのがこのメイドンだったのである。

後に「フランケルに最も接近した馬」との称号を得ることになったナサニエルは、3歳緒戦で初勝利を挙げると、3歳6月にロイヤルアスコットのG2キングエドワード7世S(芝12F)で重賞初制覇。そして、その次走に選択したG1キングジョージ6世&クイーンエリザベスS(芝12F)で、ワーカフォース、セントニコラスアビールといつた古馬の精鋭を撃破して優勝。デビューワーク目にして英國12F路線の頂点に立つというスピード出世を果たすことになつた。

4歳時にはサンダウンのG1エクリップスS(芝10F7Y)を制したナサニエルは、13年からニユーセルス・パークスタッドで種牡馬となつた。これだけの良血馬が、2つのG1制覇を成し遂げて産地に帰つてきただのである。生産者からはこの馬に大きな期待をかけたいという声も聞こえた。しかしその一方で、活躍の舞台は10F以上で、前述したように2歳時は未勝利。そして、デビュー戦で敗れたフランケルも同じ年に種牡馬入りしており、どうしても、父ガリレオという点でも共通していたフランケルの影に、隠れる印象があつたこと

も事実だつた。そして産駒が走り始めてみると、御存知のようにフランケルは種牡馬としても超大物ぶりを發揮。一方のナサニエルはと言えば、目立つた活躍馬が出ないまま、歐州ファーストシードンサイヤーランキングで23位に甘んじることになつた。

ところが、である。3歳の春を迎えて、長い距離を走るようになって、状況は一変。にわかに、ナサニエル産駒が重賞戦線を賑わしはじめたのだ。日本産のヴィクトワーリピサ産駒ウォーリングステイツが勝つた、5月1日に獨国のミュンヘンで行われたG3バーヴアリアンクラシックで、ナサニエル産駒のエンジョイヴィジエイとカスターが2着と3着に。5月10日にチエスターで行われたLRチャリエアオーケスをエンネイブルが優勝。5月20日にニユーバリーで行われたLRファリーズトライアルをナターヴィアが制覇。5月21日に伊国のかパネットレで行われたG2伊ダービーでバックオノボードが2着に。そして、エンネイブルとナターヴィアの2頭出しで臨んだG1英オーケスでエニブルが優勝。フランケルに先駆けて、産駒による歐州クラシック制覇を果したのだった。

こういうタイプゆえ、日本向きの種牡馬ではなさそうだが、歐州で今後、おおいに人気を博すことは間違ひなさうである。